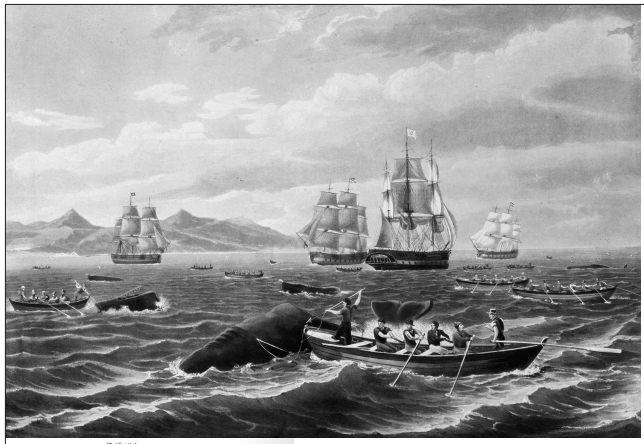
第５章（12）外に危機、内にも悩み―異国船と天保の改革―

運命をきりひらいたジョン万次郎

周藤 新太郎

1　運命をきりひらいたジョン万次郎をフォーカスに



②アメリカでのジョン万次郎
（『漂洋瑣談』京都府立京都学・歴彩館蔵）

①アメリカ捕鯨船とキャッチボート（『マッコウクジラの群れ』ピーボディ・エセックス博物館蔵）

（12）外に危機、内にも悩み ―異国船と天保の改革―

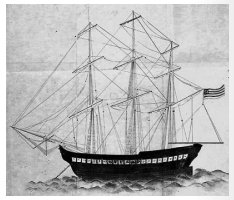
14歳の少年がアメリカに渡ったころ，日本近海で何が起きていたか。蘭学者と幕府はどうしたか。

■ 運命をきりひらいたジョン万次郎　フォーカス

1841年，土佐（高知県）の万次郎（14歳）は，はじめて漁にでましたが，嵐にあい無人島に漂着してしまいました。143日後、アメリカの捕鯨船が通りかかり救助されました。そのころ日本近海には，アメリカの捕鯨船がたくさん操業していたのです。

日本では，沖合で，鯨を多数の船で囲んで網と銛で捕っていました。万次郎は，アメリカの捕鯨が日本とまったくちがうことに驚き，興味をもちました。アメリカで，英語をはじめ数学，測量術，航海術などの本格的な教育をうけ，捕鯨船をまかされる技術を身につけました。

24歳になった万次郎は，母のいる故郷にもどろうと，1851年，琉球への上陸に成功しました。よく年，土佐で母との再会をはたしました。



③モリソン号

『ともに学ぶ人間の歴史』p.130より

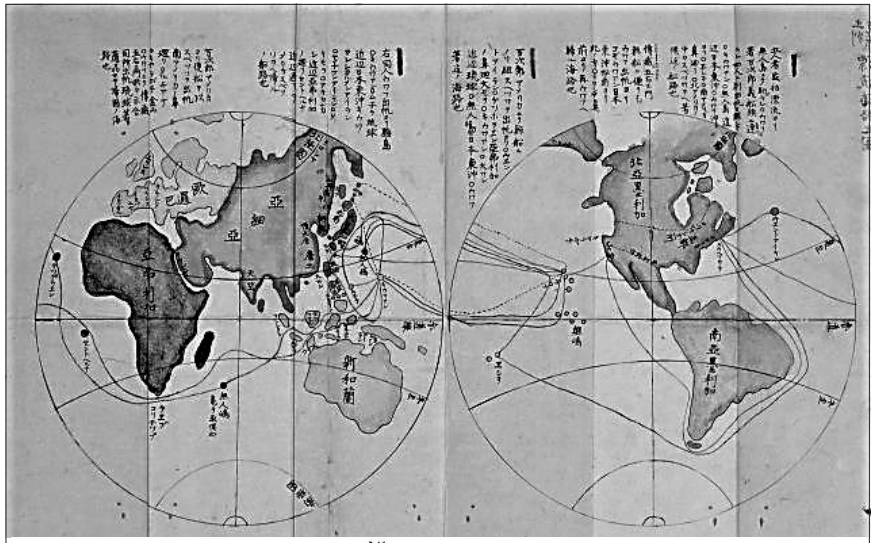
14歳で漁の途中漂流し、無人島に流れ着いた万次郎。約半年後、彼はアメリカの捕鯨船に救助された。彼は日本人として初めてアメリカの教育を受け、一人前の航海士となって鯨を追いかけ大海原を駆け巡った。そして母との再会を果たすべく、砂金掘りで得た資金でボートを購入し、自力で日本に帰還する。

万次郎と同じ年代の中学生が、フォーカスを読むことによって、彼の行動に驚嘆し、共感を呼び起こすことになるだろう。そして万次郎がそこまで成し遂げた力はなんだろうか、と疑問をもつだろう。そこから一人の少年の成長を通して、幕末の日本をとりまく外国の動きや国内の変動を考えさせていきたい。

2　世界地図から辿るジョン万次郎の冒険の旅

1841年1月、14歳の万次郎はひとりで働く母を助けるため、兄貴分たちに頼んで漁船に乗せてもらった。沖で漁をしていたところ、運悪く嵐で遭難、無人島の鳥島に漂流した。約半年後、食糧となる海亀を獲りに鳥島近くに来たアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に救出された。恐れず何事にも興味を持つ万次郎を、船長のホイットフィールドはかわいがった。万次郎は西洋式捕鯨に興味をもち、そのまま捕鯨船に乗り続けた。その間、船員たちから船の名前にちなんでジョン万とよばれるようになった。1843年5月ニューベッドフォードに帰港すると、万次郎はホイットフィールドの援助で小学校を経て当地の最高上級学校に学び、英語、航海術、捕鯨の技術などを習得した。19歳になった万次郎は、自ら捕鯨船に乗り、約3年にわたって航海をおこなった。この間、彼の航海技術は飛躍的に上達し、下級船員から副船長まで昇格した。

1849年帰港した直後、カリフォルニアで金が発見されたと聞くと、すぐ現地にはいり砂金を採って600ドル以上の財産を手に入れた。万次郎は、母親との再会を忘れてはいなかったのだ。ホノルルでボートを購入し、上海へ茶を買い付けに行く船の船長に頼み、ボートを船に積んで途中の沖縄で降ろしてもらうことになった。1850年12月、ホノルルを立ち、翌年1月、沖縄近くでボートを降ろしてもらった。後は自力で沖縄に向かい、難しい操縦だったが、摩文仁に上陸することができた。その後長崎で幕府の取り調べを受け、土佐に帰り、母と再会したのが1852年10月であった。



5 万次郎の航海を聞きとって土佐の絵師が描いた世界地図／万次郎は大西洋からインド洋をまわって，太平洋で捕鯨をおこなった。〈『管見叢話』東京都立中央図書館蔵〉

『ともに学ぶ人間の歴史』p.131 より

生徒には実際の世界地図を提示して、万次郎が1841年1月に鳥島に漂流し、アメリカの捕鯨船に助けられ、1843年5月、アメリカの捕鯨基地ニューベットフォード（ボストン近郊）に帰港するまでの航路を大まかに辿らせてみたい。その航路の地点となる、高知（土佐）、鳥島、ホノルル、グアム、タヒチ、ホーン岬、ボストン（ニューベッドフォード）を順々に辿らせて線を引かせる。

次に、1846年5月に再び捕鯨船に乗る3年間の航路。大西洋を横切り、アゾレス諸島、喜望峰を回りインド洋をいっきに横断、スンダ海峡、ティモール、パプアニューギニア、グアム、小笠原諸島、琉球近海、マニラ、仙台沖合、ホノルル（ここで西に旋回）、グアム、ティモール、インド洋を再び横断、マダガスカル近海、喜望峰を回って、セントヘレナ島近海、大西洋を横切りニューベッドフォード着。

最後にサンフランシスコに行き、カリフォルニアで砂金を得て、ホノルルを経由して沖縄、高知（土佐）に帰り着くまでの航路、経路を辿らせ、線を引かせる。ニューベッドフォード、ホーン岬、サンフランシスコ、ネバダ、カリフォルニア、ホノルル、沖縄。このように辿っていくと、どれだけ長い距離を万次郎が航海をしたのかが実感できるだろう。

教科書131ページに載せてある地図は、聞き取りを行った土佐の絵師が、当時の日本で流行した平射図法の両半球世界図に記入したもの。漂流期間、捕鯨船の乗組員時代、帰国のコースと色分けをしてある。万次郎から聞いて、その航路を線で描いたその絵師も、生徒と同じように、その距離の長さ、行動範囲の広さに驚いたことだろう。

3　なぜ19世紀に捕鯨業が盛んだったのか

万次郎は、食糧として海亀を獲りに島へやってきたアメリカの捕鯨船に救助された。どうしてアメリカの捕鯨船が日本近海に来ていたのだろうか。1787年イギリスがオーストラリア沖でクジラを獲り始め、アメリカは1821年頃から日本の金華山沖で獲り始めた。イギリスとアメリカは大西洋のクジラを獲り尽くし、太平洋に来たのだった。当時、クジラはいろいろなことに使用されていた。①機械用の潤滑油として②産業革命以降、深夜労働のためのランプの燃料として③婦人が使用したコルセット、ペチコートのバネとして④化粧品の原料として、等である。特にランプの燃料として、鯨油の需要が拡大した。日本では和時計、文楽の操り人形のバネ、肉は食用、骨、内臓は肥料にした。万次郎はアメリカ人がクジラの肉を海に捨てているのを見て、「もったいない。牛、豚を食べるから捨てるのだろうか」と考えた。この当時、2年から3年の遠洋漁業が盛んになり、その中心はホノルル、グアムであった。1840年はホノルルに383隻の捕鯨船が停泊していた。ホッキョククジラ、セミクジラ、マッコウクジラを手銛で撃ち、銃でとどめを刺し、船で解体し、脳油から始まって肉以外のあらゆるところを使った。ジョン万次郎を救助した船は3000樽の鯨油を持ち帰ったという。1840年代から1860年代が盛んな時期で、母船にキャッチャーボート4隻を載せ、1回の航海は3年程度であった。イギリスの船はオーストラリアに犯罪者・流刑者を運び、帰りに鯨油を積んで帰った。アメリカの捕鯨の基地ニューベッドフォードは鯨油によるろうそく産業が発達した。しかし1860年代に石油の油田が発見され、石油の分留が始まると捕鯨業は衰退した。日本は網獲り式の捕鯨であったが、万次

郎によって銛による方式が伝わった。

4　ジョン万次郎から学べること

世界地図で万次郎の航路を辿らせながら生徒に質問をする。生徒の関心度、知識などを考慮しつつ適当に質問しながら進める。

(1)「どこの国のどんな船に救助されたか？」バイキング船・ダウ船・ジャンク船・帆船・蒸気船などの図版を示す。教科書にはモリソン号の図版があるのでヒントになる。何人かを指名したあと「こんな船です。アメリカの帆船です」とジョン・ハウランド号の絵（帆船）をかかげる。

(2)「ジョン万次郎のジョンは、この船の名前からとったそうです。この船は捕鯨船ですが、クジラを獲ってどうしたのだろう」生徒「肉を食べた？」アメリカでの産業革命の様子を説明する。

(3) ジョン万次郎は一流の航海士となって、今度はさらにホーン岬を回って、1850年5月、サンフランシスコに行きカリフォルニアで砂金を掘る。

「その砂金で何を買ったのだろう？」ハワイに渡り1本マストのボート（アドベンチャー号と命名）を購入した。「何のためにボートを買ったのだろう」

(4) ジョン万次郎から聞き取りを行った土佐藩の絵師が、世界地図に万次郎の航海ルートを線で書き込んだパネルをみせる。「おそらくこの絵師も君たちと同じように興味深く線を引いたのかもしれないね」となげかける。

万次郎の学習を通して、世界史的視野にたって、幕末の日本がおかれた状況を理解させたい。すなわち、アメリカやイギリスが産業革命を推進し、その中で捕鯨業や中国市場への進出がおこなわれた延長上に、外国船の到来やペリー来航があることを理解させたい。

そしてなによりも、生徒との年齢が近いジョン万次郎の異国の地でたくましく生きぬく意志の強さから学び、生徒の「共感」を呼び起こしたい。以下の生徒が書いた感想を読むと、ジョン万次郎は生徒の共感を呼ぶ教材になると考える。

○　生徒の感想

「私はジョン万次郎という人のことを全く知りませんでした。まだ14歳なのに、外人だらけの船に乗って生活したなんて、私は信じられませんでした。それに子どものうちから大人と一緒に働いていたし、ジョン万次郎はしっかりしていて、とてもすごいと思いました。地図をたどって、ジョン万次郎の航路を見ると、世界中を旅したすごさが分かります」(S)

「ジョン万次郎という名前は聞いたことがあったけど、何をしたのかは全く知りませんでした。幼くしてこんな長旅を成し遂げてしまうなんてすごいなぁと思いました。アジアと西欧の社会の違いなど一緒に学ぶことができ、とても中身の濃い授業だったと思います。ジョン万次郎の旅の経路を確認していくうえで、聞いたこともなかった地名がたくさん出てきたので、これをきっかけに、国名や地名をもっとたくさん学んでいかなければならないと感じました」(A)

「ジョン万次郎が勝海舟などと一緒に船に乗ってアメリカへ渡ったという話や、幕末に活躍したということ、遭難した時に助けてくれた船の船長さんが、英語やフォーク・ナイフの使い方まで教えてくれたという話や、お母さんにとても会いたがっていたという話は知っていた。しかし彼がどんなルートで航海をして、どこの国に寄ったか、どれくらいそこに居たのか、などという話は、今回はじめて聞き、とても興味深かった」(K)

「こういう好奇心たっぷりな人こそ、世界史を学ぶには適しているんだなぁーと思った」(T)

【参考文献】

中濱博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』冨山房インターナショナル　2005年（p.30、p.53に万次郎の正確な航路が載っている）

春名徹「異端の海外認識」週刊朝日百科『日本の歴史96 近世から近代へ8』2004年